

準備委員会企画 対談

本総会では、シンポジウムでも（招待）講演でもない、その中間的な形式の企画として、対談というセッションを3つ設けた。これらは、通常のシンポジウムでは“話題提供者の主張がじっくり聴けない”とともに“議論が深まりにくい”といった面があることを考慮して提案されたものであり、本総会を特色づける企画だったと考えている。以下に、各々について、企画の趣旨と実際に行なわれた対談の概要を記述する。

対談1 フィールドワークによる仮説の生成

話し手 箕浦康子（お茶の水女子大学）
話し手・聞き手 南博文（九州大学）
司会 浜名外喜男（兵庫教育大学）

【企画の趣旨】

研究の方法論としてどのようなアプローチを選択するかは、問題の性質や研究者の考え方などによって異なるであろうが、現在の教育心理学的研究は、一般に、研究者自らがありのままの現実と接し、それらを自分独自の切れ味の鋭い視点をもってとらえようとする姿勢に欠けているように思われる。また、仮説を検証する過程に重きが置かれすぎ、検証に値する味のある仮説をいかに生成するかという点が軽視されているようにも思われる。さらに、おそらくこれらの事柄は定式化することが難しいため、研究者育成においても軽視されてきたように感じられる。

箕浦氏のごく最近の著書によれば、フィールドワークとは「人と人の行動、もしくは人とその社会および人が創り出した人工物 (artifacts) との関係、人間の営みのコンテクストをなるべく壊さないような手続きで研究する手法」であるが、本対談では、主にフィールドワークによる仮説の生成の問題（特に、箕浦氏の著書に記されている、切れ味の鋭い“概念的カテゴリー”を見いだす“ワザ”や、領域密着理論を一般的な抽象度の高いフォーマルな理論に熟させる“ワザ”）についてお話しいただくことを目的とした。

【概要】

最初に、南氏からの“なぜ心理学においてフィールドワークをしようと思ったのか？”という問いと“なぜ仮説生成ということを強調するのか？”という問いに箕浦氏が答えることを導入として、箕浦氏によるフィールドワークに関するミニレクチャーが行われた。そこでは、まず、“箕浦氏は心理学の中でフィールドワークを始めた

のではなく、家庭裁判所の調査官として多くの少年事件に関わる中で心理学に対して絶望感を覚え、文化人類学がもっとも人を状況と密着した形で捉えることができるのではないかと考えて、文化人類学という領域の中でフィールドワークを始めたこと”や、“心理学を教えなくてもいい（心理学という枠にとらわれる必要がない）立場になって初めて学生にフィールドワークを教えるようになったこと”、“欧米における理論や仮説を日本に導入するのではなく、日本の社会を理解するために、借り物の知識によらずに、日本の社会の現実の中から仮説を立ち上げる必要性を強く感じたこと”などが語られた。続いて、フィールドワークの内容・方法に関して、“フィールドワークの対象となる actor もフィールドワーカーも、それぞれの文化の衣をまとった存在である”、“actor によって語られることだけでなく、（それよりも）そこで実際に交わされている相互作用・言語が重要である”、“actor のなんらかの行為は、あくまでその状況に対するその人の解釈に基づくものであり、それをまたフィールドワーカーが解釈するという意味でフィールドワークは二重の解釈過程に基づいている”、“参与観察に費した時間の2倍程度の時間をかけて（可能な限り観察の直後に）フィールドノーツを整理することが大切である”、“フィールドノーツの分析とデータの収集は、螺旋状に絡み合って同時進行すべきものである”、“記述的分析を概念的分析に高められる（そのための切れ味の鋭い分析概念を見いだせる）か否かがフィールドワークの成否の鍵である”といった見解が述べられた。

以上のような内容のミニレクチャーの後、南氏が再び箕浦氏にいくつかの問いを投げかけ、それらに対して箕浦氏が逐次返答するという形式で進行した。その中に、“どのようにしたら切れ味の鋭い分析概念を見いだせるのか？”という問いがあり、これに対して箕浦氏は、それがもっとも難しい（苦しい）点であることに言及した上で、“ある程度のバックグラウンドを持つ聞き役が存在が大切である”、“思いついたことを、それ専用のノートなどに逐次記録しておき、それを後で参照することが役に立つ”、“物事を多様な視点から見られるようになるために見識の幅を広げる努力をしておくことが大切である”といった提言をした。また、南氏の“学生に対してフィールドワークの訓練を始めたときの苦労は？”という質問に対して箕浦氏が“ものが見えてきた’と感じる学生は半数もおらず、そのような感覚がないとフィールドワー

クは続かないこと”や“仮説検証型の研究では統計的に有意なデータが得られても得られなくてもそれが1つの結果となり得るが、フィールドワークでは‘何かが見えてこない’ともものならず、そのような意味でフィールドワークはリスクであること”を述べ、さらに、それに対して南氏が、“学問としてリスクな方法を推薦するか?”という(誘導的な?)問いを最後に投げかけた。そして、これに対して箕浦氏が“論理実証主義中心であった近代という時代とそこに生きた人々を理解するために論理実証主義が続くとは思わないし、さまざまな主義が許容される時代になってきた”, “新しいことを行おうとしたらリスクは付き物であり、リスクを犯さないかぎり変革はない”といった見解を述べて対談が終了した。

対談2 教育心理学研究のレフェリー経験談

話し手 内田伸子 (お茶の水女子大学)

話し手 森 敏昭 (広島大学)

司 会 松山安雄 (甲南女子大学)

【企画の趣旨】

投稿した論文が学会誌に掲載されるか否かは、それが学問の本来の目的ではないにしても、現実には、ほとんどの研究者にとって重要な関心事であろう。そして、他の(おそらく、あらゆる)制度と同様に、学会誌に投稿された論文の審査制度およびその運用には、さまざまな問題点が存在するであろう。それは、制度そのものの問題、査読者の問題、投稿者の問題に大別されるであろうが、これらの問題が多くくの学会員が会している場で語られることは、これまでには、ほとんどなかったように思われる。そのため、個々の会員が論文審査の在り方に対して抱いている疑問や要望などが審査制度についての論議に十分には反映されていないように考えられる。また、投稿者と査読者の間のコミュニケーションが必ずしも円滑にはなされていないことの一因になっているのではないかと推測される。

このようなことから、教育心理学研究に投稿された論文の審査を数多くしてこられた内田氏と森氏のお二人に、論文審査の在り方に関するご意見や投稿者へのアドバイスなどを中心にして、経験談をざっくばらんにお話しただく場を設定した。

【概要】

まず、内田氏が、査読者、一投稿者、学生を指導する教官、教心研の愛読者、という4つの立場を総合して、審査制度、査読者の役割、投稿者の心得などの事柄について、考えを述べた。そこでは一般の学会員にとって情報価の高いことが数多く話されたが、紙面の関係で、以下に主な内容を抜粋する。

1) 投稿された論文の領域の専門家ではない人が査読者になることがあり、そのために、内容が十分には理解されずにコメントがなされていると考えられるケースがある。そして、このような現状の一因として、査読者が編集委員のみで構成されていることが挙げられる。したがって、場合によっては、編集委員であることに固執せず、当該の領域の専門家であることを重視して査読者を選定した方が望ましいと考える。ただし、査読者が全て編集委員であることが審査の迅速化に寄与していると考えられる点も考慮する必要がある。

2) 査読者に関しては、“誤解に基づく見当外れのコメント、根拠を明示していないコメント、注文の多すぎるコメント、(おそらく専門的に深く関わっているがゆえの)自説防衛的・感情的コメント、などがなされることがある”といった問題点が存在する。“親切な修正要求をする”, “投稿者に対して competitive にならない”, “挑戦的な論文を高く評価する”といった姿勢を持ち、論文として一定の水準に達していると判断されるものに関しては、教育的配慮のもとに、なるべく採択してほしい。

3) 投稿者に関しては、“基本的な事柄としてミスをなくすこと”, “投稿する前に研究者仲間や指導教官などに論文を読んでもらってコメントを受けること”, “立場の違いや誤解に基づくと考えられるコメントに対しては、自分の意見を明確に主張し、査読者に対して過度に従順な態度をとらないこと”などの点に留意する必要がある。

続いて森氏が、“どうすれば城戸賞をもらえるか?”という、やや斜め(?)の視点から、主に若い投稿者を対象とした提言をした。具体的には、①揺るぎないデータを得るとともに、日本語としてきちんとした論文を書くこと(採択されない無印論文にならないために)、② originality と creativity のある、重要なテーマを選ぶこと(1つ星論文から2つ星論文にレベルアップするために)、③教育への implication について考えること(2つ星論文から3つ星論文にレベルアップするために)、といった事柄に関して、そのための具体的方策を例示しながら考えを述べた。

さらに、森氏が内田氏に問いを投げかける形式や、フロアの中で査読をした経験がある方々にお二人が意見を求めるといった形式で、査読者の選定の問題や、常任編集委員会において最終的に総合評価を下す際の過程・基準の問題、査読者の質の向上策などについて、提案・討議がなされた。

対談3 教育現実と心理学者

話し手 梶田 叡一 (京都ノートルダム女子大学)

話し手・聞き手 島崎 保 (兵庫教育大学)